

わたしの聖戦

◎◎女性が働くということ◎◎ 41

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津江

「慣れる」と「狎れる」

一般的にいつて、男性より女性のほうが適応能力豊かといわれる。

比較的女性は環境が違っててもそれに慣れるのが早く、いつのまにかすっぽり周囲に馴染んでしまふ。打たれ強く逆境に負けないのが女性であると評価されるのもそのためと思われる。

実際、こんなに変化の激しい現代社会では、新しい環境に適応していく、あるいは慣れていくことが不得手では、生きるのもちよつとしんどいかもしれない。少し前に「適応障害」という病気が話題にのぼったが、環境に

散歩は痛々しいような感じがした。
テレビの意味のない字幕はうるさくて仕方がなかった。

……、しかしどれもこれも慣れてしまい、今ではほとんど何とも思わな

洋服を着せられた犬の散歩は……



だ。

同じ読みだが、「狎れ」は必要以上に、あるいは相手の気持ちからずらぬ、度を越して礼儀を逸してしまふ行為だ。目上の人に対してタメ口をきくのをたしなめられるのは、その口調に不快な「狎れ」を感じるからだろう。

あるいは、好きでもないのであればこれ口説かれたり、知らない相手から過度に親しすぎる態度を示されたりすると嫌な気持ちになるの

も同じこと。人の悩みは人間関係に始まり人間関係に終わるといわれるが、たいていはこの「狎れ」にまつわる失敗から来ているように思う。

「慣れ」は必要だが「狎れ」はいけない。そもそも、「狎れ」の

漢字自体がよろしくない。ケモノヘンにはあまり品のいい漢字がないし、人をだまして面白がる「狸(たぬき)」とよく似ているから要注意である。ところから、私にはいつまでたっても「慣れない」ことがある。

例えば、「のほう」「よろしかったでしようか」「一万円はいりませう」といった最近定着しつつある言葉遣いや、ワイドショーのコメンテーターの知ったかぶり、あるいは電車のホームや車内放送の多言と煩わしさ、などなどである。

確かに「慣れ」はいい。生きていく知恵でもある。しかし、これだけは「慣れたくない」、そう思えることをいくつ持っているかもまた、人生を生き抜く上で必要な気がするのである。

イラスト・三浦義雄